

Kipling の ‘Imperial Gothic’ 小説

～ ‘Mark of the Beast’ 分析

芦 川 和 也

I. 序

ラドヤード・キプリング (Rudyard Kipling) の作品が同時代の人々に与えた影響は文学界においてのみならず、社会的にも大きく、その功罪は確かに見逃せない。けれども、その「罪」の部分にだけ焦点を当てるのではなく、彼の影響力の大きさという「功」の部分にも光をあてないとキプリング批評は不完全なものになってしまう。インベリアリズムという考え方を支持するのではなく、一作家としてのキプリングが1900年前後のイギリスに与えた、その影響力の「大きさ」自体は評価すべきである。彼が、文学史から安易に消し去ることはできない作家であることは確かである。

キプリングはインベリアリストといわれており、その傾向があるのはエドワード・サイード (Edward Said) の *Orientalism* においてのみならず周知の事実である。サイードの定める「知識人」の対極をなす人物という指摘も的を射ている。しかし、アフリカ・アジアを総称してオリエントという括り方に問題があるのと同様に、キプリングはインベリアリストであり、帝国主義の風潮を1900年前後のイギリス国内で扇動した責任者とだけみなしてよいのであろうか。¹¹⁾ 確かにキプリングはその時代の代表的作家であり、斜陽の時代にはいりつつある大英帝国の中で、国民意識を高揚する詩や小説を書き、それゆえにイギリス人初のノーベル文学賞まで受賞した。それゆえ、彼にその時代自体の責任を負荷しがちなのであるが、作家としての技量すら否定すべきではない。つまり、あまりにも「キプリング＝インベリアリズムの旗手」という一面的な見方だけでは彼の様々な特徴を見逃してしまうのである。そこでこの論文では、彼の作品の中にどのようにインベリアリズムが反映されているか、ということを一ひとつの短篇を例にとって分析していくことにする。

II. 'Mark of the Beast' について ～「銀色の男」とアイシャ

インペリアリズム的な要素のある作品の中で、パトリック・ブランドリンガー (Patrick Brantlinger) は「インペリアル・ゴシック」について述べている。帝国主義作家は、東洋の未知なる精神世界やオカルトなものに対して、反射的に敵対するのではなくて、むしろ魅力を感じ、さらにそういったオリエントの神秘性を自分のインペリアリズムを補強するものとして利用する、と指摘する。この結果生まれたのが、「インペリアル・ゴシック (Imperial Gothic)」というカテゴリーである。あとで触れるが、ライダー・ハガード (Rider Haggard) の *She* などがその代表的なものである。

そのような「インペリアル・ゴシック」の傾向はキプリングについてもいえるのであるが、それだけにとどまらないものもある。彼の短編集のひとつ *Life's Handicap* の中に、「Mark of the Beast」という興味深い短篇がある。キプリングお得意のインドものであり、超自然的なものを扱っている。この小説においても、彼の物語作家としての才能が遺憾なく発揮されている。そして我々はこの短篇の中にある、キプリングのインドがもつ神秘性の伝え方を推し量ってみたい。

以下の冒頭の諺とそれに続く部分が象徴的である。

Your Gods and my Gods -- do you or I know which are the stronger?
Native Proverb

East of Suez, some hold, the direct control of Providence ceases; Man being there handed over to the power of the Gods and Devils of Asia, and the Church of England Providence only exercising an occasional and modified supervision in the case of Englishman.

This theory accounts for some of the more unnecessary horrors of life in India... (p.195)

いかにもインドに造詣のある作家ならではの引用であり、言い回しである。キプリングの場合、政治的にはインドをイギリスが統治するという事実は認めており、植民地政策自体を否定はしていない。両国の理想的姿はイギリス主体のもとに作り上げて行くべきであると考えていた。しかし、ここに見られるように、宗教上でも、一概にイギリスの支配を望んではいなかった。これはキプリングがインドで育ったことや、フリーメーソンに属していたことにもよっている。⁽²⁾ 引用から分かることは、信仰する神々それぞれに支配地域があることを表現することによって、彼はイギリスとインドの差異をよりはっきり感じさせる効果をもたらしているのである。けれども、インドの神を軽蔑するようなことはなく、神の存在価値に優劣を付けるようなことはしていない。ただ単に、人々に降り懸かる神の影響力は、それぞれ信奉する神々から、それぞれに及ぼされるといっているのみである。

さてこの短篇の内容であるが、まずは‘Mark of the Beast’という題名について触れておくべきであろう。聖書の「ヨハネの黙示録」(16:2)に、この「獣の刻印」がでてくる。神の激しい怒りの入った七つの鉢の第一番目によって、「獣の刻印」を持った人と、その像を拝む人には悪性の腫瘍ができてしまうのである。この話にキプリングはインスピレーションを得ていることは明らかであり、それをふまえながら分析していくこととする。

キプリングの定めた舞台は大晦日のインドであり、新年を迎えるパーティーが開かれ、インド中から在印イギリス人が集まって来た。そしてインドに渡って来たばかりで、高原の自分の住まいから駆けつけたフリート (Fleete) が、パーティーの帰りにある事件を起こす。酔った勢いながら、ある神殿にまつられてある、インドの猿の神ハヌマーン

(Hanuman) の石像を冒瀆するのである。フリートがハヌマーンの像の額に葉巻の吸い差しを灰ごとこすりつけて、「獣の印だ！俺がつけてやった！（Mark of the B -- beast! I made it!）」と叫んだ。いかにもインドについての知識が未熟なことがわかる。だからフリートはインドに関する知識の少ない、あるいは誤って理解している（少なくともキプリングにはそう感じられた）イギリス本国の人々を代表しているのである。そうして、インドの神秘的なるものへの対応の危うさや甘さに警鐘を鳴らし、インドの文化を軽蔑してはならないという意識を植え付けようとしている。

さて、騒然と神殿中がする中で、その神殿に住み着いている「銀色の男 (a Silver Man)」が登場する。この男は、ひどいらい病を患っていて、顔さえも見分けがつかないほどであった。

Then without any warning, a Silver Man came out of a recess behind the image of the god. He was perfectly naked in that bitter, bitter cold, and his body shone like frosted silver, for he was what the Bible calls 'a leper as white as snow'. Also he had no face, because he was a leper of some years' standing, and his disease was heavy upon him. (p.197)

「銀色の男」に抱きつかれ、呪いをかけられたフリートは徐々に狼に変身していくという、『山月記』を思わせるような展開となっている。(彼のらい病患者に対する扱いについては、差別的認識に基づいていることは批判を免れないであろうが、そのテーマについては今回は棚上げしておく。)

「銀色の人物」を考察する上で、やはり呪いの超自然的な力を持つ、アイシャ (Ayesha) に触れておきたい。ハガードは She の中で、洞窟の女王アイシャを登場させているが、この絶世の美女は、アマハッガー

人 (Amahaggers) という洞窟の民を統治している。アイシャは、かつてギリシャ人の娘アメンアルタス (Amenartas) と争って、自らの手で殺してしまった恋人の生まれ変わりを信じて、二千年もの間若さを保ちながら女王として君臨しつつづけてきた。彼女の統治はあからさまな恐怖政治であり、自分の命令に背くものは死をもって償わされていた。この洞窟の女王は、西洋人ではなく、強権的な政治を行っていることから南アフリカの神秘性を象徴しているようにも見える。いかにもオリエント的な人物のように思える。けれどもアイシャの統治についてローラ・クリスマン (Laura Chrisman) は、以下のような興味深い指摘をしている。

If the Egyptian princess Amenartas represents one Orient, Ayesha represents another, a 'pure' Arabia, uncontaminated by assimilation into a Western genealogy. Orientalism is already therefore a divided and flexible construct here, not a monolith of otherness. And, perhaps, precisely because of her exclusion from the West, Ayesha in her very abstract Orientality can serve as the West's effective proxy in this discourse. Her despotism functions as imperialism's inadmissibly absolutist fantasy of its own power, exercised over a hybrid — possibly 'savage' — sub-Saharan Africa, and as admission of imperialism's actual authoritarianism.⁽³⁾

つまり、アイシャは西洋の代理人としての機能を果たしているというのである。King Solomon's Mines 同様、She も探検小説という形式の中で、西洋人が南アフリカに分け行くことによって、結果的にそれまでの現地政治形態に何らかの崩壊をもたらしている。洞窟の女王アイシャは、恋人の生まれかわりのレオ (Leo) に彼女の二千年守り続けたあらゆる権利をゆずろうとしているところからも、クリスマンの、アイシャは西洋の代理人という指摘は興味深い。さらにクリスマンは、女王の相

反する二面性や、彼女の政治学の矛盾を指摘して、インベリアリズムそのものの崩壊が読みとれると述べている。

‘Mark of the Beast’の「銀色の男」の場合は、ハヌマーンの神殿において決して支配者ではない。が、であるからといって神殿に使える人々に軽蔑されているわけではない。ハヌマーンを冒瀆したフリートに対して「僧侶たちは銀色の男がフリートに触れるまでは、いきり立っていた。彼の抱擁が僧侶たちの怒りをしずめたようだった」と、「銀色の男」の呪いの力を認めている。むしろ、ハヌマーンの像の後ろから、この男が登場したことから、神の化身のような印象を読者は受ける。禍々しいけれども何かしらの力を持っていることはたしかである。（しかも、‘a Silver Man’というように不定冠詞をつけて、固有名詞を与えていないことによって、このらい病患者は個性が消されているのである。キプリングは、このような人物はインドのどの仏像のもとからも現れうることを示したかったのではないだろうか。）アイシャも自分の人民を処刑するときに、超自然的な、そして圧倒的な力を披露している。だが、この二人の存在は異なっている。その差異は、フリートの友人である主人公とストリックランド（Strickland）が、呪いを解く方法でより明らかとなる。二人のイギリス人が用いた解決策は「銀色の男」を生け捕りにし、拷問して呪いを解かせるという、力づくのものであった。効果は観面でフリートは無事正気に戻る。イギリス人の拷問に屈服するという結末は、自らの役割を果たし終え、恋人に権限をゆずり、自ら命を絶つアイシャとは大きな違いがある。

武力的、すなわち帝国主義的解決方法をキプリングは絶対的に肯定的に扱っているわけではない。「銀色の男」を拷問する場面は「この部分は活字にすることができない」と意図的に削除しているのである。イギリスがインドを武力で制圧したことを象徴しているような短絡的な解決方法に対して、キプリングは、やむを得ず採用する方法であり、「イギ

リス人の名誉を永久に辱めてしまった」という扱い方をしている。主人公である「私」はこの蛮行にはじめは乗り気でなく、友を思うあまり荷担する気になったのであって、急を要したという背景がある。

In the moonlight we could see the leper coming round the corner of the house. He was perfectly naked, and from time to time he mewed and stopped to dance with shadow. It was an unattractive sight, and thinking of poor Fleete, brought to such degradation by so foul a creature, I put away all my doubts and resolved to help Strickland from the heated gun-barrels to the loop of twine -- from the loins to the head and back again -- with all tortures that might be needful. (p. 204)

Ⅲ. キプリングのインペリアリズム

前章で述べた 'Mask of the Beast' についての分析を普遍化すれば、キプリングのインドに対する姿勢と、彼の限界を垣間見ることができる。彼の中には、インドをイギリスに伝え、両者の関係を先導しようという自信があったように思える。それは他の人にその役割は任せられないという自負である。イギリスとインドの両国についてもっともよく理解しているのは自分であり、であるからインド世界をイギリスに伝えなければいけないと思った。その異質性・神秘性について。

もちろんキプリングのインドについての理解自体、不完全で未熟なところはあった。ナイラッド・チョウドリー (Nirad C. Chaudhuri) も短篇 'The Miracle of Purun Bhagat' を引き合いに出して、キプリングのヒンドゥー教精神に対する誤った認識を指摘している。

ヒンドゥー教の宗教感情は、自然が人間に課したすべての規制から自由になろうとする、精神

性本来の動機に忠実であった。従って、ヒンドゥーの精神性は至福の追求ではなく、力の追求といえる。……このことは、ヒンドゥー教の精神性を論じた西洋の作家たちには理解されなかった。ここに、キプリングの有名な短編小説「聖者プルン・バーガト」を引き合いに出して、その理解の不足を例証してみよう。……物語では、社会奉仕にめざましい経歴を持つ、ある藩王国の宰相が隠遁者になってヒマラヤ山中にこもり、近隣の村人たちが届けてくれる食物だけで空腹を満たしながら、宗教的瞑想に専念している。ある夜、彼は山崩れの震動に目を覚ますと、やにわに外に飛び出し、行動の人として村人を救う。ここでキプリングはこのようにコメントする——「彼はもはや聖者ではなかった。インド帝国中級勲爵士サー・プルン・ダースであった。人命救助に出かけていったのは、けっして小さいとはいえない藩王国の宰相であり、命令しなれている男であった。」

この説明はまったく誤っていた。なぜならヒンドゥー教には、そうした区別は存在しないからである。⁽⁴⁾

ここにキプリングのある種の限界が感じられる。実際、‘The Miracle of Purun Bhagat’における、ハヌマーンに対する侮辱に対する罪に対して、キリスト教の聖書に出てくる罰し方を用いた。これは、文化の融合を感じさせるというよりも、多分にハヌマーンのキリスト教化を感じさせずにはおらず、インドの人々には納得しにくい設定となっている。キプリング自身のハヌマーンへの理解の浅さ、あるいは冒涇ともとられるかもしれない。インドの神をキリスト教の尺度で測ることは抑圧に他ならないのである。

とはいうもののやはり、インドの風物についての確かさのレベルという点は同時代の他の作家の及ぶところではない。ハガードの南アフリカの記述について、正確さという点ではもはや読むにたえられない点が多いのに対して、キプリングのインドについての認識は評価できる。批判したチョウドリーでさえもキプリングの *Kim* を、インドについて西洋人が書いたものの中でもっとも優れた本であると評している。

キプリングはインドの理解できないものに対する警告や、イギリス人の理性的な顔の裏に隠れた野蛮ぶりを示しながら、最後には何事もなかった状態に戻してこの短篇を結んでいる。これは、当時のイギリスの政

策に対する物足りなさとは別のインド支配の方法を模索しようという彼の意図が伺えるのである。イギリスの単なる植民地政策には全面的に迎合しているわけではない。キプリングの作品に、フォースター (E.M. Forster) らによって受け継がれる二つの異文化の橋渡しを探ろうとする大きな流れの芽が生まれていることは、ジョン・マックルーアー (John McClure) も指摘するところである。⁽⁵⁾

インドは生地であり、慣れ親しんだ土地である。その国に対して大きな愛着を感じているキプリングは、イギリスの力でインドを「良い方向」に導かせたかったのである。その上で、彼にしてみれば、帝国主義下の世相においてはイギリスの安定を保つためにはインドに対して、植民地という形を取るしかなかった。⁽⁶⁾ 不本意ながらというよりも、その中でどうすればよいかという方向性であった。ジョージ・オーウェル (George Orwell) はキプリングのインベリアリズムを「伝道活動」と評している。

. . . [H]e had never had any grasp of the economic forces underlying imperial expansion. It is notable that Kipling does not seem to realise, any more than the average soldier or colonial administrator, that an empire is primarily a money-making concern. Imperialism as he sees it is a sort of forcible evangelising.⁽⁷⁾

そして、帝国主義下でしか模索できなかったところにキプリングの限界がある。彼がアメリカからイギリスに戻ったときの、国民の帝国主義に対する無関心さや、第一次大戦後にイギリスが勝者側に立ったにも関わらず、その世界的地位が下落してしまったことには納得がいかなかった。青年たちは、国に不満を抱き、領土を拡大しようという欲求は失われてしまった。キプリングは政治的な失望を覚えたのである。コンスタンティン・フィップス (Constantine Phipps) が次のように述べて

いる。

When Kipling returned to England from America, he found a large minority of people who greeted each stage of Imperial Expansion with reluctance or even disapproval. And most people in England were simply ignorant of the Empire. It must have astonished Kipling coming from an India where England was the very symbol and fountainhead of authority, order and justice, to find a little island people for the most part ignorant of and uninterested in their Imperial possessions. Kipling was quick to pour scorn on insular complacency.⁽⁸⁾

このようなことから見ても、キプリングのインペリアリズムはむしろ、バターナリズムというべきである。

IV. 結び

結果的に、いずれの国にも深くかかわり合ったキプリングはいわば大英帝国の吹き溜まりに目を向けつつ、その中でストーリー・テラーとしての役割を果たした。彼は当時の人々に、インドの実態を知らしめ、両国の橋渡しのきっかけになったとはいえよう。確かにそれは未熟なものであり、現代の観点から見れば、多分に抑圧の面の方が目に付くかも知れない。が、ピエール・マカリー (Pierre Macherey) が論じたように、テキストは突然変異的なものではなく、その背後にある社会的歴史的力量をもとに組み合わされたものであるのである。だから、キプリングが歴史の扇動者なのではなく、彼自身その流れの中の一分子と見た方がよい。そして彼の作品の中から、我々は当時のインペリアリズムの風潮を、窺い知ることが「できる」のである。

オーウェルの指摘したように、キプリングの多数派としての立場は、「知識人」とはいえないが、逆に的確に世相を把握しており、その点に関しては評価を下げるものではない。⁽⁹⁾

[注]

(1) Laura Chrisman. 'The Imperial Discourse' pp.501-502. (in *Colonial Discourse and Post-Colonial Theory*. ed. Patrick Williams and Laura Chrisman.)

(2) キプリングの詩の中に、'The Mother-Lodge' という、フリーメーソンに関するものがある。

(3) Laura Chrisman. 'The Imperial Discourse' p.504.

(4) N. C. チョウドリー 【ヒンドゥー教】 p.388.

(5) John McClure is representative of recent critics when he argues that Kim not only repudiates racist modes of characterisation, but also dramatises the repudiation, that it is a Utopian portrayal of future racial harmony, and that it is perhaps a more effective antidote to racial antipathies than any of Conrad's works (which he has already praised for their attacks on racist forms of representation). (Patrick Williams: 'Kim and Orientalism')

(6) . . . [T]hey could have achieved nothing, could not have maintained themselves in power for a single week, if the normal

Anglo-Indian outlook had been that of, say, E. M. Forster. Tawdry and shallow though it is, Kipling's is the only literary picture that we possess of nineteenth-century Anglo-India. . . (Edward Said, *Orientalism*)

(7) George Orwell. 'Rudyard Kipling.' p.126.

(8) Constantine. 'Introduction' of *The Day's Work*. p.7.

(9) Although he had no direct connection with any political party, Kipling was a Conservative, a thing that does not exist nowadays. Those who now call themselves Conservatives are either Liberals, Fascists or the accomplices of Fascists. He identified himself with the ruling power and not with the opposition. In a gifted writer this seems to us strange and even disgusting, but it did have the advantage of giving Kipling a certain grip on reality. (George Orwell. 'Rudyard Kipling.' p.138)